

海外事務所だより

シドニー事務所

インターンシップ研修

～ニュージーランド・マールボロウ市

シドニー事務所所長補佐 恒石 敏宏(高知県派遣)

はじめに

シドニー事務所では、赴任2年目職員を対象に、オーストラリアまたはニュージーランドの地方自治体に1週間インターンとして研修するプログラムがあります。職員各自が自治体に依頼して受け入れてもらうのですが、私はニュージーランド南島の北に位置するマールボロウ市に受け入れていただき研修をしてきましたので、マールボロウ市の概要や政策、産業、またそこで私が経験したことについて紹介したいと思います。

マールボロウ市の概要

ニュージーランドの政府構造は2層構造で、中央政府と地方政府に分けられます。地方政府は、①地域自治体 (Territorial authority) = 基礎的自治体、②広域自治体 (Regional council) = 広域的



市街地風景

な環境・地域資源保全、公営交通等を担当する自治体、③統合自治体 (Unitary authority) = ①と②の機能を併せ持つ自治体に分けられます。これら地方政府は、いずれも国の法律により設置され、その間に上下関係はありません。マールボロウ市は③の統合自治体です。

マールボロウ市は、面積は17,517km²と、日本第2位の面積の岩手県 (15,278.89km²) より広いのに対し、人口は約42,500人の地方都市です。市街地では高層ビルなどといったものはなく、市の大部分は畑や自然が占めています。またこの市には信号が存在しません。交差点は、「ラウンドアバウト」というロータリー交差点のような形をしていて、信号がなければ交通事故が頻発して危険なのではないかと思いましたが、ラウンドアバウトの既走車両優先のルールは交差点での交通においてかなり合理的であり、また郊外はともかく市街地ではスピードを出して走っている車はほとんどないので、滞在中はほとんど危険を感じませんでした。

市議会には、直接公選される市長 (議員を兼務) をはじめ、全部で14名の議員がいます。執行部は首席行政官 (Chief Executive) をトップに、総務部など5部で構成され、職員は約200名います。その中で、戦略・政策部の部長が私のインターンシップ研修中のお世話をしてくれるとともに、ホームステイ先としても私を受け入れてくれました。

また、マールボロウ市は、山形県天童市、長野県小谷村とそれぞれ姉妹都市の提携をしています。市役所内には、天童市から送られた記念品が



マールボロウ市役所

飾られており、郊外の公園には日本庭園も作られています。

政策

マールボロウ市が力を入れている政策は、リソースマネジメント（資源管理）です。私はインターンシップの研修の間さまざまな部署の紹介を受けましたが、ほとんどの部署でこの言葉が使われていました。現在、市では国の資源管理法（Resource Management Act 1991）に基づき、持続可能な資源管理を促進するため、資源管理に関する地域政策綱領（Regional Policy Statement）、およびその綱領に基づいた資源管理計画（Resource Management Plan）を作成しています。現行の綱領は、1995年に完成しており、現在作成中の綱領は2011年に完成する予定です。綱領は、マオリの人々と共同して作成することになっており、現在市内の8つの部族とワーキンググループを作り、議論を重ねながら綱領を作成しています。

資源管理に関して市が行っている業務の中で興味をひかれたのは、リソース・コンセント・ヒアリング（Resource Consent Hearing）という、環境紛争に対する市議会の会議でした。これは、業者等が、資源の使用に関する開発計画、自然破壊の可能性のある開発計画を市に提出した場合、その内容が市役所を通じて一般に公開され、その計画に対し反対する者がいた際に開かれる会議で、この中でその計画の是非が論じられます。計画提出者、異議申立者はそれぞれ弁護士や科学者等の専門家を伴い主張の根拠を提供し、双方の主張を

聴いた後でこの会議で最終判断を下します。

この会議を構成する3名の委員は、5名の市議会議員からローテーションを組んでいます。議長はこの会議において経験を積んだ議員の中から市長が任命します。この会議は1案件につき1回のみ開催され、会議での判断に不満がある者は、環境裁判所に申し立てをすることができます。

環境裁判所は、上記のResource Management Act 1991に基づいて環境紛争について審理し、判決を下す法定の専門裁判所であり、その判決に不満がある場合は、日本の高等裁判所に相当する高等法院（High Court）に控訴することも可能です。

産業

マールボロウ市の主な産業は、大きく分けて3つあります。ひとつは輸出により利益を得る林業、もうひとつはムール貝やカキの養殖をはじめとする漁業、そして最後のひとつはワイン産業です。

実際マールボロウ市の農地はどこへ行ってもほとんどがブドウ畑であり、広大な大地に果てしなく続くかに見えるその姿は圧巻でした。ニュージーランドのワインの約60%はマールボロウ市で作られており、大小あわせてかなりの数のワイナリーが存在しています。大きなワイナリーの近くには運送会社があり、ワイン製造後はすぐに輸送できるような体制になっています。また大きなワイナリーにはレストランや会議場なども付いており、結婚式等もそこで行うことができます。実際に、結婚式を行うためにさまざまな国からカップルが



ブドウ畑

マールボロウ市を訪れており、なかには日本から来た人もいます。

ニュージーランドはソーヴィニヨン・ブランという種類の白ワインが美味しいことで有名で、マールボロウ市内のワイナリーは、大きなところで、Montana、Saint Clair、Whither Hills、Cloudy Bay、Villa Mariaなどがあり、これらはオーストラリアの酒屋でも、大概手に入れることができます。ただ、地元の人（特にホームステイ先の家族）によると、こういった大きなワイナリーのソーヴィニヨン・ブランワインもいいが、あまり有名でない小さなワイナリーの、ソーヴィニヨン・ブランではない白ワインもお勧めだそうです。そう言われて立ち寄った、Gibson Bridgeという小さなワイナリーで売られていたピノ・グリという種類の白ワインは、何度もワインの賞を獲得しており、実際非常に美味でした。

マールボロウ市役所内では、資源管理、環境保護に関する話題が多く、あまりワイン産業に関しては話題に上らなかったのですが、マールボロウ市長のアリスター・ソーマン氏は、できるだけマールボロウのワインを国内、海外を問わず売り出し、広めたいと考えていると語っていました。そのため、ニュージーランドワイン、マールボロウワインの世界的な知名度を上げていくことがひとつの課題であるそうですが、現在ワイン産業は価格競争の真ただ中におり、大変な時代であるそうです。

インターンシップでの経験

マールボロウ市は、インターンの私のためにいろいろな部署を紹介してくれるとともに、貴重な体験を与えてくれました。管理職以上が参加する市役所の内部管理に関する会議に参加させられたり、雨で水かさが増した川の測量調査に連れて行ってもらったり、建築確認の現場に立ち会わせてもらったり、市が管理する港、空港等の施設を見学させてもらったり、さまざまところに連れて行ってもらうとともに、たくさんのことを教えていただきました。

なかでも私が最も印象に残った経験は、毎週木

曜日に行われる市議会の最中に、議員および職員、傍聴する市民の前で私の派遣元である高知県の概要についての説明を行ったことです。インターンシップ初日に、私の地元を市役所の方々に紹介する機会をいただきたい旨のお願いをしており、プレゼンテーションの準備もしていたのですが、まさか議会中に大勢の方々に前に紹介をするとは思ってもみませんでした。事前に練習していた甲斐あって、紹介自体はなんとかうまくやれましたが、こういった公の場で英語で地元の紹介をすることはほとんどなかったので非常に緊張しました。プレゼンテーション終了後にはすっかり背中に汗をかいてしまいましたが、とてもいい経験になりました。

私がインターンシップでマールボロウ市を滞在した時期は、市議会議員選挙の2カ月前ということもあり、プレゼンテーション後の質疑応答では、日本の選挙制度について問われ、その説明にまた汗をかくことになりましたが、マールボロウの方々が、このプレゼンテーションを通じて少しでも日本に対して関心を持ってくれたことに対し、嬉しさとともに充実感を覚えました。

おわりに

この1週間での経験は、私にとってシドニー赴任期間の中でも非常に重要なものとなったと感じています。書類だけの机上の知識だけではなく、実際自分の目で見て、耳で聞いて、体で感じる、まさに生きた勉強ができました。また職員の方の家にホームステイをさせていただくことにより、市役所の業務だけでなく、ニュージーランドの生活、マールボロウ市民の生活についても知ることができました。市役所の方々はもちろんのこと、ホームステイ先の家族、その周囲の人々との交流もできました。その方々は、私がシドニーに戻ってもことあるたびに連絡をくれるとともに、仕事なりプライベートなり、将来日本に行くことがあれば私の地元を訪れたいと言ってくれています。

この経験や交流は私にとって財産であり、日本に帰ってからも大事にしたいと思います。



海外生活 だより

シドニー事務所

オーストラリアの小学校

シドニー事務所 大林 泰子(北海道恵庭市派遣)

はじめに

娘の学校を現地校にするか日本人学校にするか、悩んだ末にわが家は娘を現地校に通わせることに決めました。最初は不安なことが多く、日本人学校にしたほうが良かったのだろうかと思った時もありましたが、学校でさまざまな方との素敵な出会いがあり、親子共々、オーストラリアでの生活を満喫しています。

娘の学校生活から、オーストラリアの小学校の様子を伝えたいと思います。

地域交流の場としての小学校

オーストラリアでは、ほとんどの保護者は通学の送迎をします。そのため、朝と帰りの時間帯は校内のあちこちで、送迎にきた保護者同士が世間話や情報交換をしている姿が見られます。送迎をする父親も多く、話の輪にもよく加わっています。放課後ともなると、校庭で子どもたちを遊ばせながら、大人たちはあちらこちらで楽しそうに立ち話に興じています。帰りの時間帯は、先生も話の輪に加わることもあり、授業などについて聞くことができます。

娘の学校では、元在校生の保護者などの地元住民ボランティアの方が行事や授業のサポートをしており、学校はまさに地域のコミュニケーションの場。例えば、マルチカルチャーネットワークというものもあり、ESL授業のサポートや多文化料理等のイベントを主催し、外国からの移住家族が地域にとけこむ手助けをしてくれます。

わが家のように移住してまもない家族にとって、地域交流や情報交換の場は、学校の授業のこ

とから些細な生活情報などまでも聞くことができ、非常にありがたい存在です。

多文化社会の縮図

渡豪前から、オーストラリアは多文化社会であると聞いていましたが、こちらで生活をし、改めてその多様性に驚きます。娘のクラスメートには、韓国系、中国系、インド系、そしてヨーロッパ系と国際色豊かです。～系としましたが、祖父母が移住者で自分は生まれも育ちもオーストラリアという子もいれば、近年移住したばかりという子もいます。もちろん韓国系とヨーロッパ系、あるいはインド系とヨーロッパ系のミックスというのも珍しくありません。バックグラウンドも多様で、例えばインド系の方には、インド本国からの移住者とイギリスからの移住者がいます。また、白人の方に話しかけると、近年エクアドルから移住してきたばかりで英語があまり話せないといわれ、白人の方が必ずしも英語が話せるわけではないということを実感しました。

このような環境の中で、子どもたちは自分の家庭の文化とは違う文化をもつ友人を抵抗なく受け入れ、その文化に興味を持ちます。ある日、娘が「アンジャ！」と息子に言っています。聞くと韓国語で「座りなさい」という意味とのこと。韓国系のクラスメート同士が話しをしているのを聞いて、自然と覚えたようです。一方で、娘もクラスメートに日本語の挨拶や折り紙を教えているようです。

小さい時から他の文化を享受できる環境は、本当に羨ましい限りです。また、多文化共生社会を支える大人たちも子ども同士の交流を通じて、多

様な文化を共に楽しみ理解を深め、視野を広めているように感じます。

楽しい学校行事

日本の小学校と共通するような行事も多々ありますが、ここではオーストラリアならではの行事を紹介したいと思います。

まず、「ディスコ・ナイト」。小学生からディスコをするのかしら！と驚きましたが、息子が通う保育所でもディスコなる催し物がありました。現地の方によると、こちらでは小さい時から集団生活の一環としてディスコダンスを楽しむのは一

般的のようです。このディスコ・ナイトは、保護者有志による企画行事でした。会場設営、受付や子どもたちの監視など保護者がすべて担っています。



ディスコ・ナイトの様子

ディスコは金曜日の夜、日が沈んだ頃にはじまり、学年別に時間が割り振られています。受付で参加費を支払い、いざ会場へ。壇上では、プロのDJがノリノリの音楽をかけ、おしゃれをきめこんだ子どもたちに「さあ次は、隣の人と向かい合わせになって～！ハ～イタッチ！」などと声をかけます。子どもたちは、リズムにあわせてジャンプしたり、クルッと回ったり。すごく楽しそうです。大人顔負けのブレイクダンスを披露する子もいます。私は、会場出入口の監視を担当しましたが、一緒にお手伝いをしていたお母さんが「今回のDJはいけてるわ～」と楽しそうにリズムをとっていました。

読書週間の時期にあわせてあった「ブック・ウィーク・パレード」も非常に印象的でした。生徒が自分の好きな本のキャラクターになりきってパレードするというものです。ここまでは、日本の学校でもありそうな行事なのですが、何が違うかという仮装に対する力の入れようです。はらべ

こあおむし、三匹の山羊のガラガラドン、人魚姫、長靴下のピッピなど、きっとお母さんやお父さんが夜なべをして作ったものなのでしょ



ブック・ウィーク・パレードにて、仮装した子どもたち

に感心し、見ているだけで楽しくなります。

全校生徒の前で生徒の名前とキャラクターの紹介がされると、どの子も恥ずかしがることなく堂々と壇上に上り、笑顔をふりまきます。なかには仮装をしていない子もいるのですが、そこは先生が機転をきかせて、「〇〇くんは『近所のお友達』という仮装をしています」といった紹介をし、拍手を誘います。

拍手とともに聞こえてくるのが、「ヒューヒュー！」という口笛と大きな歓声。パレードを見にきた大人たちが、まるで大学生のようなノリで、場を盛り上げます。もちろん先生方も凝った仮装をします。ちなみに先生方で人気だったのは「ウォーリーを探せ」のウォーリーでした。

おわりに

娘の韓国系の友人がわが家に遊びに来たとき、突然「昔、韓国と日本はケンカをしていたのよね。でも、今は仲良くやっているらしいし、私はハナ（娘の名前）のことが大好きよ」と言われ、ドキッとしたことがあります。きっと韓国にいる祖父母に何か聞かされているのでしょうか。しかし、子どもたちが国籍・肌の色などに関係なく無邪気に遊んでいる様子を見ると、このような多文化社会の環境を享受し成長した子どもたちが世界を平和へと導いてくれるのではないだろうかと将来への希望を感じます。そして、小さい時からお互いの文化に興味をもち、自然体でその文化を自分に取り入れていけるとというのが、今のオーストラリア社会の強みになっているのではないのでしょうか。